

社説

詩人の谷川俊太郎さんのこんな作品がある。

へたがたにねをまかなければ
はなは ひろかない
ほくが あしをふみだすとき
みちは かきりない
じぶんがかんがえ
じぶんではじめる
幸小のわたしたち
あさは もつこない
ほくがほくを みつめるとき
あさは かきりない
あさは もつこない
ねはって やりぬく
幸小のわたしたち
幸小とは東京都立川市にある小学校のこと。40年余の間に書かれた校歌だ。

せめぎあい 渦巻く時代に先駆けて
最後の一文だ。谷川さんは「たわつたそだ。せめぎあいは前向きでない」との市側の意見に「現実を直視せず前向きな言葉ばかりを使えば、歌は単なるきれいごとになる」と答えたという。

子どもの目に

「子どもの目に」
すくく自力で立つ子どものイメージが浮かぶ。
変化の激しい現代社会を生き抜く力をどう育むか。甘やかすのも突き放すのでもなく、「じぶんがかんがえ」「ともに励む楽しさ」に気付かせることが大人の役目なのだろう。

大人こそ役目をしっかりと

人だった。神戸の進学校・難中で3年間かけて明治期の小説「銀の匙」を読み込む授業で知られた。貧困の歯止め見えず
物語にべんべん草(ナスナ)が出てくると、そこから春の七草、閑遊する和歌、秋の七草との違いへと話題を広げる。駄菓子も服が登場すれば、実際にそれを食べたり作ったりして体感する。桃の節

事を昼夜掛け持ちしたりで、親子がともに過ごす時間が少ない。温かな食事を一緒に囲むことができない。病氣やけがをしても病院に行けず、外で思いきり遊べない。健全な「育ち」を妨げる貧困の広がりに、歯止めがかかっていない。深刻な児童虐待の事例も相次いでいる。

た「子供の未来応援基金」がある。5カ月間に集まった寄付金は、わずか2千万円に達せず。学習支援や食事の提供、放課後の居場所づくりなどのために個単位の寄付を見込むものの、期待された大手企業の反応は鈍く、呼びかけた政府もどこまで本気なのか疑われるを得ない。